

「このままでは、村がこわされる！」

村人たちはふるえ上がり、鬼をおとなしくさせる方法はないかと、来る日も来る日も話し合いました。

そんなある日、村の長老が言いました。

「いい方法を思いついた！ 鬼たちと取り引きをしよう！」

長老は覚悟を決めて、鬼に会いに行きました。

「神社に行く坂道が急で、こまっています。あの坂に、一〇〇〇の石段をつくってほしいのです。もし、一晩でつくれたら、わたしどもは、ずっと、あなたたちにおつかえします。

けれども、つくれなかったときは、この村には、二度と近づかないでもらいたい」

「ほほう、それはおもしろい。いいだろう。その話、受けて立とう！」

鬼たちは、すぐに、話に食いつきました。



次の日、

王様は三びきの鬼を呼びました。

「わしは、もう、
国にもどらなければならぬ。
おまえたちは、ここに残ったまま、
働くのだ」

「うお、もう、帰りたいよ」

「もう、ここには、いたくはないよ」

王様のおとを許されなかった鬼たちは、
なみだをぼろぼろこぼしながら、
わめきました。

三びきの兄弟は、ふもとへおりては、
家々をなぎたおし、
田んぼや畑をあらすようになりました。
親をなくした悲しみ、
王様におきざりにされたさびしさをはらすかのように、
あばれました。



雪がしんと降り、男鹿半島の大みそかの夜。

「なまはげ」は、村の家々をめぐり歩きます。

「なまはげ」に会えるのは、一年に一度だけ。

その姿が見られることを、だれもが心待ちにしています。

村人たちは知っています。

姿はこわいけれど、気持ちが悪く、りちぎで働き者。

「なまはげ」は、幸福を運んでくる守り神であることを。

おたけびをあげて、立ち去る「なまはげ」。

そのうしろ姿を見送る村人たちは、こうつぶやきます。

「なまはげさん、どうか、来年も、また来てください」

